

スピノザにおける人間の自由について

—「存在しない個物すなわち様態の観念」をめぐつて—

四 竜 正 夫

スピノザにおいて、人間は、個物の一つとして、神の属性を一定の仕方で表現する様態である。

したがって、その身体は、延長の属性を一定の仕方で表現する様態である。

そして、両者は、二つの仕方で表現された同一物として一個の人間を成す。

ところで、人間は、他のすべての個物すなわち様態と同様に、

ある時は存在せず、次に存在へとやって来て、やがて存在の外へ

出ていく、束の間の存在である。それは、持続における存在であ

る。

しかしに、スピノザは、「エチカ」、第二部、定理八で、「存在しない個物すなわち様態の観念」を問題としている。

これは何であり、どのような意義を持つのだろうか。また、これが含まれているという「神の無限な観念」とは何であり、どのような意義を持つのだろうか。さらにまた、これらのこととは、個

物の一つとしての人間の救済の問題に、どのように関連するのだろうか。そして最後に、これに伴って、先の観念の対象である「個物すなわち様態の形相的本質」は、どのような在り方をする

と考えられるのだろうか。

一

まず、「エチカ」、第二部、定理八、および、系を挙げておく。

「存在しない個物すなわち様態の観念は、個物すなわち様態の形相的本質が神の属性の中に含まれているのと同様に、神の無限な観念の中に含まれていなければならない」。

「個物が、神の属性の中に含まれている限りにおいてしか存在しない場合、その観念的有すなわち観念は、神の無限な観念が

存在する限りにおいてしか存在しない。だが、個物が、神の属性の中に含まれている限りにおいてばかりでなく、また、持続する

と言われる限りにおいても存在すると言われる時は、その観念

もまた、持続すると言われる存在を含む」。

さて、「存在しない個物すなわち様態」とは、M・ゲルーも言ふように、「個物すなわち様態の形相的本質」であるが、これが「神の属性」の中に含まれているのと同様に、これの観念は「神の無限な観念」の中に含まれているというのである。これは、系

からも明らかなように、持続における存在ではない。「存在しない……」と言われる所以がここにある。だが、個物が持続において存在する時、その観念もまた持続において存在する。通常、存在すると言われる観念は、このような持続において存在する個物の観念である。⁽⁶⁾

では、持続においては存在しないが、「神の無限な観念」の中に含まれているという「存在しない個物すなわち様態の観念」とは何であり、どのような意義を持つのだろうか。また、この観念が含まれているという「神の無限の観念」とは何であり、どのような意義を持つのだろうか。

ここに言われる「神の無限な観念」は、ゲルーも言うように、思惟の属性における無限様態である。これは、次のように理解されるであろう。

「ニチカ」、第一部、定理三にて、「神の中には、神の本質の観念、および、神の本質から必然的に生じるすべてのものの観念が、必然的に存在する」と言っているが、思惟の属性における無限様態としての「神の無限な観念」は、この定理に言われる「神の本質の観念」、および、「神の本質から必然的に生じるすべてのものの観念」から成って⁽⁸⁾いる。

「神の本質から必然的に生じるすべてのものの観念」は、この無限様態の内容を構成するものであり、「神の本質の観念」は、その内容を統一體たらしめるものである。さて、「神の無限な観念」の中に含まれているという「存在し

ない個物すなわち様態の観念」は、「神の本質から必然的に生じるすべてのものの観念」の一部をなすであろう。逆に言えば、「神の無限な観念」の内容を構成している「神の本質から必然的に生じるすべてのものの観念」は、「存在しない個物すなわち様態の観念」、および、「持続において存在する個物すなわち様態の観念」から成っているであろう。⁽¹⁰⁾

我々は、今、「神の無限な観念」の内容を構成している諸観念を、「存在しない個物すなわち様態の観念」と「持続において存在する個物すなわち様態の観念」とに分けた。しかし、ここで「存在しない個物すなわち様態の観念」とは言われても、それは決して、存在し得ないもの、例えば、キマイラ等の観念ではない。

また、可能的に存在するものの観念でもない。

では、「存在しない個物すなわち様態の観念」とは何かと問うならば、それは、エ・ラスベクスも言うように、必ず存在するが、未だ産出される時ではないところの必然的な存在についての観念であると言うことが出来るであろう。この表現を補ってなお言うならば、「存在しない個物すなわち様態の観念」とは実は、「現在は持続において存在しないが、過去あるいは未来に、必ず存在した、あるいは、存在するであろう個物すなわち様態の観念」であると言うことが出来るであろう。

要するに、「神の無限な観念」の内容を構成しているのは、「過去、現在、未来を貫く無限な持続における、ある時期に、神の本質から必然的に生じるすべてのものの観念」であると言う

ことが出来るである。こうして、「存在しない個物すなわち様態は、ある時態の観念」は、「持続において存在する個物すなわち様態の観念」と相俟つて、「神の無限な観念」を、内容的に完結する役割を果していると考えられるであろう。

「神の無限な観念」の内容を構成する諸観念について、さらに検討を進めよう。これらの諸観念は、「神の本質から必然的に生じるすべてのものの観念」であるが、これと関連する言及は、「エチカ」、第一部、定理一六にある。「神の本性の必然性から、無限に多くのものが、無限に多くの仕方で（換言すれば、無限の知性によって把握され得るすべてのものが）、生じなければならない」。そして、第一部、定理二五、備考によると、定理一六から、次のこと、すなわち、神の本性が与えられると、事物の本質および存在が必然的に結論されなければならないということが帰結されるという。こうして、「神は、事物の存在の起成原因であるばかりでなく、また、その本質の起成原因である（定理二五）」⁽¹³⁾ということになる。

まず、ここに言われている本質についてであるが、これは、ひとまずは、H・H・ジヨアキムが現実的本質と同一視するところ⁽¹⁴⁾、「エチカ」、第二部、定義二⁽¹⁵⁾に言われている本質であると考えられるであろう。従って、我々は、これを以て、即、永遠な本質であるとは考えないであろう。

次に、ここに言われている存在についてであるが、そもそも個物すなわち様態が存在するということは、既述のように、持続に

おいて存在するということである。個物すなわち様態は、ある時は存在せず、次に存在へとやつて来て、やがて存在の外へ出ていく、束の間の存在である。すなわち、無限な持続における一定の期間だけ存在し得るものである。したがって、神が事物の存在の起成原因であるということは、次のこと、すなわち、神は、ある個物が、無限な持続における特定の時期に存在し始め、そして、その存在に固執することの原因であるということを意味する。⁽¹⁷⁾「形而上学的思想」、第一部、第三章の次の陳述は、これを明解に説明している。「われわれが、神は、ある三角形が存在すべきことを決定したと言う時、われわれは、他でもない、神は、その三角形が、ある時期に必然的に存在すべく、自然と諸原因の秩序を定めたということを言おうとしているのである」。

要するに、「エチカ」、第一部、定理二二五の述べていることは、個物における本質、存在、双方における必然性であろう。V・デルボも言うように、両者は、等しく神を必然的な原理として持つ⁽¹⁸⁾のである。そして、「形而上学的思想」の先に挙げた部分に続く次の陳述も、これに言及している。「もし、われわれが、諸原因の秩序を、神によって定められたとおりに認識すれば、われわれは、ある三角形が、ある時期に現実に存在しなければならないということを、三角形の本性に注目して、その三角の和が二直角に等しくなければならないことを発見するのと同じ必然性を以て、発見するだろう」。

ところで、「エチカ」、第一部、定理二二五は、大変一般的な仕

方で述べられているが、スピノザは、第五部、定理二二、証明でこれを引用するにあたり、次のように特殊化して言い換えている。「神は、あれやこれやの人間身体の存在の原因であるばかりでなく、また、その本質の原因でもある」。

こうして、「神の無限な観念」の内容を構成する諸観念とは、始めも終りもない持続における特定の時期に、特定の本質を持つものとして、神の本質から必然的に生じるすべてのもの、そして何にもまして、人間の、観念であるということが出来るである。⁽¹⁹⁾

二

次に、「存在しない個物すなわち様態の観念」が、「神の無限な観念」の中に含まれているという陳述は、人間の救済の問題に関連しないだろうか。

「エチカ」、第五部、定理二三に、「人間精神は、身体とともに完全には滅ぼされ得ず、その中の永遠なものは、後に残る」と言われる。B・ルセは、これを、第二部、定理八に関連させて、次のように言う。永遠性が、常に身体についての観念であるところの精神の一部に認められ、しかも、永遠性がこの存在の不滅の永続を含むなら、そしてしかるに、身体は、その現実的存 在が持続によって表現され、時間によって測られる可減的様態でしかないのなら、われわれは、「様態が存在しないのに、この様態の観念が存在する」という驚くべき結論に到達する。⁽²⁰⁾

この問題を考察するにあたり、まず、スピノザにおける精神の永遠性について、H・A・ウォルフソンによつて、見ておこう。ウォルフソンは、次のように述べている。精神と身体とは、まさに切り離すことが出来ない、したがつて、それらの一方が存在すると言われる場合は、他方も存在すると言わなければならない。さて、存在には二種類ある。一つは、一定の時間と場所に関連して存在すると考えられる限りにおいて現実的と考えられる事物について言われる存在であり、もう一つは、神の中に含まれ、神的本性の必然性から生じると考えられる限りにおいて現実的と考えられる事物について言われる存在である。言うまでもなく、ここで、ウォルフソンは、「エチカ」、第一部、定理八、系、および、第五部、定理二九、備考を考えているのである。⁽²¹⁾

さて、どちらの存在においても、精神は、身体から切り離すことが出来ない。そして、精神も、身体も、同じ種類の存在で、存在すると言われる。現実に存在する身体の精神は、現実的存在を持つが、これは、感覚に基づく表象力や記憶力を持つことによつて、性格づけられる。身体が現実に存在しなくなると、精神のこれらの能力も存在しなくなる。というのは、「精神は、身体が持続しなければ、何ものも表象することが出来ず、また、過去の事物を想起することが出来ない（第五部、定理二二）」からである。⁽²²⁾

しかし、身体が現実に存在しなくなつた後でも、精神はなお、観念的 existence を持つ。というのは、「しかもなお、神の中には、あ

れやこれやの人間身体の本質を、永遠の相の下に表現する観念が、必然的に存在する（第五部、定理二二）」からである。神の中にあって、人間身体の本質を表現するこの観念は、人間精神の本質に属するあるものである（第五部、定理二三、証明）。というのは、人間身体は、人間精神を構成する観念の対象だからである（第二部、定理二三）。こうして、スピノザは結論する。「人間精神は、身体とともに完全には滅ぼされ得ず、その中の永遠なるものは、後に残る（第五部、定理二三）」。

後に残ると言われる精神の中の永遠なあるものとは、身体の本質を永遠の相の下に表現する観念であり（第五部、定理二九）、知性である（第五部、定理四〇、系）。それは、ウォルフソンによれば、感覚、記憶、表象、および、それに伴うすべてのものを奪い取られた、精神の中の思惟領域である。ここに、当然、察せられるであろうように、精神の不死性は、個人的、個別的である。中世において、不死性を神との合一と理解した人々の間では、不死的精神の個別の相違は、個人の生前における知的達成度およびその性格から結果するものと説明された。そして、スピノザも言う。「精神の本質は認識にある。それゆえ、精神が、より多くの事物を、第二種および第三種の認識で認識するにつれて、それだけ精神の大なる部分が残る（第五部、定理三八、証明）」。

では、精神の中の永遠なあるものは、一体、どこに残るのだろうか。ウォルフソンは、身体の死後、これは、これが生じてきたところの思惟の属性と一つになるべく戻っていくと言ふ。⁽²⁵⁾ だが、

われわれのこれまでの考察からするならば、これは当然、「神の無限な観念」⁽²⁶⁾の中に残る、否、より限定するならば、思惟の属性における直接無限様態としての「神の無限な観念」の中に残ることを考えられるであろう。というのは、これは、神の中に必然的に存在するところの、あれやこれやの人間身体の本質を永遠の相の下に表現する観念の一つとして残ると考えられるであろうからである。

三

これまでには、「エチカ」、第一部、定理八における「存在しない個物すなわち様態の観念」を問題として取り上げることによって始められ、進められてきた考察であった。そこで、次に、この観念の対象であるところの「存在しない個物すなわち様態」、あるいは、「個物すなわち様態の形相的本質」が問題として取り上げられる。

「エチカ」、第二部、定理八、および、系から、個物すなわち様態が、持続において存在しない場合でも、「個物すなわち様態の形相的本質」は、「神の属性」の中に含まれているということが知られるであろうが、これをわれわれはどうに理解すればよいのであらうか。

この点に関し、ゲルーによれば、「短論文」では、様態の本質は、この様態が持続において存在しない場合、様態としてではなく、属性の中に含まれていると考えられているという。換言す

れば、様態の本質は、その場合、属性からも、他の諸様態からも区別することは出来ないと考えられている。そして、このことは、この様態を対象としている観念についても同様であるといふ。⁽²⁸⁾ 論拠とされるのは、「短論文」、第二部、第二〇章であり、第一附録、定理四、証明であり、第二附録であるが、ここでは、第二附録の次の陳述だけ挙げておく。「これらの様態は、現実に存在しないと考えられてもなお、すべてその属性に含まれている。そして、属性の中にも、諸様態の本質の間にも、いかなる種類の不等性もないから、自然の中に、区別がなければ、観念においても、いかなる区別もあり得ない。しかし、これらの様態のあるものが、個別的存在をとり、ここに、ある仕方でその属性から区別される（この場合、これらの様態が属性の中に持つて個別的存在が、それらの本質の主体であるから）と、この時、ある区別が、諸様態の本質の間に、したがつて、観念の中に必然的に含まれているそれらの想念的有の間に、生じるのである」。

このことから、ゲルーは、次のように結論する。諸本質が持続において存在する限りにおいてしか相互に区別されないなら、それらは、それらの存在を失なう時は、区別されなくなり、属性の全く等質的な有の中では、完全に消失せらるだらう。したがつて、持続において存在する個物において、個的永遠本質、すなわち、それ自身永遠な個的觀念の対象は存在しないであらう。⁽²⁹⁾

さらに、この形而上学的見解が、人間の救済の原理に対してもたらす結果について、ゲルーは、次のように述べる。持続におい

て存在する事物が、個的永遠本質を含まないのだから、身体についても、精神についても、永遠な本質は存在しない。つまり、個的永遠性は存在しない。死とともに、身体は、すべてを包む延長の中に溶け去り、一方、精神は、神の中に吸い込まれる。そこで、個別性を失ない、神が自己自身について持つところの永遠で不变な思维としてしか、もはや存在しない。これは、アヴェロエス主義に近く、未だスピノザにとって決定的な思想はあらわれていない。⁽³⁰⁾

ただし、個物すなわち様態の本質に関する「短論文」の見解の解釈に關しては、これと意見を異にする研究者もいる。G・ドゥルーズによれば、「短論文」において既に、様態の本質についての仮説が必要とされ、それが十分に使われているという、そして、様態の本質は、確かに、様態が持続において存在しない限り、外的には区別されないが、ただ属性に含まれている限りにおいても、内的様態として存在し、内的区別という特殊な仕方にいて、相互に区別されるのであるという。こうして、ドゥルーズは、ドウソス・スコトゥスを援用してスピノザを解釈し、個別化についての内的原理を考えている。

再び、ゲルーによれば、個物すなわち様態の本質に關して、「短論文」の見解は、前記のようであるが、「エチカ」では、このような見解を去つて、次のように考えられているという。すなわち、「エチカ」は、神の中に、異なる様態としての諸本質を、永遠性において定立し、各々の身体および各々の精神に対しても

的永遠本質をあて、個的永遠性の可能性を基礎づけている。言うまでもなく、ゲルーは、「エチカ」、第五部、定理二二一、「しかもなお、神の中には、あれやこれやの人間身体の本質を、永遠の相の下に表現する觀念が、必然的に存在する」を論拠としているのである。⁽³²⁾

もつとも、ゲルーは、既に、「エチカ」、第一部、定理二五において、このことは述べられているという。ゲルーは、この定理を證明とともに擧げる。實際、もし、神が本質を產出しないとする、本質は、神なしに、存在し理解され得ることになる。これは不条理である。したがって、神は、事物の存在の起成原因であるばかりでなく、また、それの本質の起成原因である。そして、本質は、神の中で、大理石の塊の中の彫像のように、単に可能的に存在するものではない。というのは、神によって產出されるものは、すべて現実に存在するのであって、可能的存在は、スピノザにとっては、全くの無でしかないからである。したがって、本質は、その存在の現実的实在とは異なる現実的实在を持つのである。⁽³³⁾

ところで、われわれが問題としているのは、個物すなわち様態のが、持続において存在しない場合でも、「個物すなわち様態の形相的本質」は、「神の属性」の中に含まれていると言われるが、これをわれわれはどういうふうに理解すればよいのであらうかということである。

では、先にも擧げたように、ゲルーが、「エチカ」は、神の中

に、異なる様態としての諸本質を、永遠性において定立し、各々の身体および各々の精神に対して個的永遠本質をあて、個的永遠性の可能性を基礎づけていると言ふ時、このことから、われわれは個物すなわち様態が、持続において存在しない場合でも、その形相的本質は、「神の属性」の中に、様態として含まれていると解すべきなのだろうか。實際、ゲルーは、「存在解すべきなのだろうか。例えば、身体が持続において存在しない場合でも、その形相的本質は、「神の属性」の中に、様態として含まれていると解すべきなのだろうか。實際、ゲルーは、「存在しない個物すなわち様態」、あるいは、「個物すなわち様態の形相的本質」を、「その永遠な本質」と見なしているのだが。⁽³⁴⁾

こうして、結局、問題は、次のようなことに帰着するようと思われる。すなわち、精神の永遠性と並行して、身体の永遠性を言ふことが出来るであらうかということである。

この点に関し、われわれは、ウォルフソンによつて見ていくたいと思う。

ウォルフソンは、次のように述べている。スピノザが認めているように、精神も身体も、神から来る。そして、神へと帰つていいであろう。だが、そうだとすれば、なぜ、スピノザは、精神の不死性ばかりでなく、身体の不死性についても言わないだらうか。精神の不死性についてだけ言つるのは、神は非物質的で、したがつて、純粹な思惟であると考えている人々にはよいだらう。といふのは、彼等にとって、神から直接的に来るのは、精神だけであり、したがって、神に帰つていくのは、精神だけだからである。しか

るに、スピノザにおいては、精神も身体も、思惟および延長という神の属性の様態であり、延長も思惟と同様に破壊され得ないというのに、なぜ、スピノザは、身体の不死性についてでなく、精神の不死性について言うのだろうか。

ウォルフソンは、この問題に対し、二つの観点から理解しようとする。まず、第一に、不死性は、単に、宇宙において思惟および延長が変ることなく維持されているということを意味するのでない。⁽³⁵⁾ 不死性は、単に、個人の死は宇宙における思惟の総量も延長の総量も減らさない、自然においては何も失なわれることなく、ただ形の変化があるだけである、というようなことを意味するのではない。不死性は、それ以上のことと意味する。不死性は、生前、個人に特有であったたなみのが、永遠に維持されることを意味する。そして、この点において、精神と身体との間には、違いがある。死後まで残る精神の思惟領域は、生前ににおける個人の特殊的性格を帶びている。スピノザにおいて、精神の不死性は、個人的、個別的である。しかしに、死後に残る身体の延長領域には、そのような特殊的性格はない。したがって、伝統的語彙を保ち、精神の不死性を言うのが適切なのであって、身体の不死性を、同じ意味で、言う根拠はないのである。⁽³⁶⁾

第二として、次のこととが言われる。身体は精神から切り離すことが出来ず、精神は、神の中の觀念であるが、身体が永遠な本質を持つのは、この精神の永遠性のゆえである。⁽³⁷⁾ これらのうち、第二のことは、ウォルフソンの指摘を俟つまで

もなく、「エチカ」、第五部、定理二二から、即、理解されることがあらう。「しかもなお、神の中には、あれやこれやの人間身體の本質を、永遠の相の下に表現する觀念が、必然的に存在する。」

そして、われわれは、この、ウォルフソンが第二として指摘しているような意味において、ゲルーの先の見解を理解するであろう。すなわち、「エチカ」が、神の中に、異なる様態としての諸本質を、永遠性において定立し、各々の身體および各々の精神に対して個的永遠本質をあて、個的永遠性の可能性を基礎づけていふとは言われていても、各々の身體が個的永遠本質を持つということは、個物すなわち様態が持続において存在しない場合でも、その形相的本質は「神の属性」の中に様態として含まれているといふことを、積極的に主張しているといふよりむしろ、精神が個的永遠本質を持つがゆえにそうなのであると理解するであろう。また、各々の身體が個的永遠本質を持つと言わざるを得ないのは、あるいは、「個物すなわち様態の形相的本質」が「その永遠な本質」と見なされるを得ないのは、精神の中の永遠なるものが、実在の中に對象を持たない理性の有（「形而上學的思想」、第一部、第一章）に過ぎないものではなくて、「神の無限な觀念」の中に含まれる實在であるということを確認するために言われていると解することも出来るであらう。そして、「存在しない個物すなわち様態」、あるいは、「個物の形相的本質」は、存在する円の中に未だ描かれない長方形が含まれているようだ（「エ

チカ」、第一部、定理八、備考)、「神の属性」の中にも含まれて、いるであらう。それをわれわれは、全ての無であると言えるだらうか。

最後に、われわれは、「神の無限な観念」の意義について警覗しよう。

「ニチカ」、第一部、定理八、備考)に、次のように述べられてゐる。「われわれは、存在しない様態的変状の眞の観念を持つこと」が出来る。ところでは、様態的変状が、知性の外に現実に存在して、なんでも、その本質は他のものの中に含まれていて、それによって理解され得るようになつてゐるからである。グルーエンのようだ、これは、われわれがどのようにして存在しない事物の観念を持つことが出来るかを説明するものであり、なんど、このことは、第一部、定理八、備考において、幾何学的例によつて説明されている。⁽³⁹⁾長方形が現実に存在しなくとも、その観念は、現実に存在する円の観念の中に含まれているがゆえに、われわれに知られる。それと同様に、「存在しない個物すなわち様態的観念」は、「神の無限な観念」の中に含まれているがゆえに、われわれに知られるであらう。

「神の無限な観念」の意義に関連して、ルルド、ペルヘザがひは離れるかも知れないが、少しく考えてみよ。

例えば、偉大な人間の永遠な精神は、たゞ、その人間がもはや生きていないとしても、われわれの精神の中に生き続けるであらう。しかし、われわれは、彼の精神を十分には理解しないかも

知れないし、また、われわれもやがて存在しなくなるであらう。だが、彼の永遠な精神は、われわれが、否、他の誰が認識しない、なお偉大であり永遠であり続けるであらう。⁽⁴⁰⁾

このような、認識するものだよつては、左右されるべきでない永遠な精神の実在性を保証するという意義も、「神の無限な観念」にはあると考えられないだらうか。

「神の中には、あれやこれやの人間身体の本質を、永遠の相の下に表現する観念が、必然的に存在する(第五部、定理二十一)、そして、われわれの精神が、各段階の認識を経て、言わば、精神の労苦の末に、身体を永遠の相の下に認識する時(第五部、定理二十九)、やなわら、知性認識する時(第五部、定理四〇、系)、われわれの精神は、思维の永遠様態として、「神の永遠、無限な知性」、すなわち、「神の無限な観念」の一部となるであらう(第五部、定理四〇、備考)。そして「ニチカ」、第四部、定理六八、備考において、ペルヘザは言う、「神の観念」は、人間が自由になるための唯一の基礎である。

#

スピノザのトキベーナ、*Spinoza Opera*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, herausgegeben von Carl Gebhardt, Heidelberg, Carl Winter, 1925 あるが、*Spinoza Oeuvres*, Traduction et notes par Charles Appuhn, Garnier-Flammarion, 1964 が選ばれた。

(一) B. Spinoza, *Ethica*, I, Propositio 25 Corollarium

(10) B. Spinoza, *Ibid.*, II, Propositio 8 Corollarium ふ。
明心ふやめ。

(11) Proposition 21 Scholium 修羅。

(12) H. A. Wolfson, *The Philosophy of Spinoza*, Meridian Books Inc., 1958, II, p. 27 修羅。

(13) ジ・スニーハークルト、*無限の本質*が本質が本質を有す
だ。無限の本質を超越する G. Deleuze, *Spinoza, Phi-*

losophie Pratique, Les Editions de Minuit, 1981, p. 100 修羅。

(14) M. Gueroult, *Spinoza*, Georg Olms, 1968, II, p. 93 修羅。

(15) B. Spinoza, *Ibid.*, II, Propositio 11 Demonstratio 修羅。

(16) M. Gueroult, *Ibid.*, I, p. 327 修羅。II, p. 93 修羅。

(17) ジ・スニーハークルト、*無限の本質*が「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」等の呼の方で言われ

(18) ジ・スニーハークルト、*無限の本質*が「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」等の呼の方で言われ
る。無限の本質を対象として持つ永遠な諸観念の統一體である直接無限本質と見ら
れる。また、持続において存在する諸事物を対象と

(19) M. Gueroult, *Ibid.*, I, p. 315 修羅。II, p. 102 修羅。

(20) B. Spinoza, *Ibid.*, II, Propositio 11 Demonstratio 修羅。

(21) É. Lasbax, *La Hiérarchie dans l'Univers chez Spi-*

naza, Librairie Félix Alcan, 1919, p. 259 修羅。

(22) 個々たる無限本質が「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」、「無限の本質」等の呼の方で言われ
る。無限の本質を対象として持つ永遠な諸観念の統一體である直接無限本質と見ら
れる。J. Wetlesen, *The Sage and the*

Way, Van Gorcum, 1979, p. 35—46 修羅。

(23) H. H. Joachim, *A Study of the Ethics of Spinoza*, Oxford, 1901, p. 191 修羅。

(24) 「*諸事物の本質*は、それが^{ある}れば、事物が必然的に

必然的に^{ある}が、それが除去されれば、事物が必然的に

取り除かれるといふのである。あることは、それなしには、事

物が、まだ反対に、事物なしには、それが、存在するといふ

も、理解されぬといふ出来ないといふのが属する。私

の持ついふいふの、持続における次々と生じる諸観念の統

一本の直接無限本質の修羅。M. Gueroult, *Ibid.*, I, p. 315 修羅。II, p. 102 修羅。

O. Baensch, *Ewigkeit und Dauer bei Spinoza*, (in:

Kantstudien, 1927—XXII), p. 79 修羅。

(25) M. Gueroult, *Ibid.*, I, p. 315—316 修羅。

(26) M. Gueroult, *Ibid.* 修羅。

- (2) ハリド、『神の無限な観念』の中を含めて「したがつて、個物としての觀念、すうわけ、個別的な人間としての觀念である」とは強調されでよいであら。ペルハサは、「短論文」、第一編、第六章で、次のように考へる人々を批判する。やだねむ、神の配慮が、個物の上には及ばず、ただ、類の上にのみ及ぶ。例えば、神は、その配慮を、ケントロ（トネクナシ）ロバ（大王の馬の名）等の上には及ばずかず、だだ、馬といふ類の上にのみ及ばず考へる人々を批判する。ペルハサは、よこは逆である。「形而上学的思惟」、第一編、第七章で、及ばず考へる人々を、神は、個物を認識するのやめいて、神が、普遍空なるを認識するのを、人間精神が認識する際には、よこはだら。
- (3) B. Roussel, *La Perspective Finale de "l'Ethique"* et *le Problème de la Cohérence du Spinozisme*, J. Vrin, 1968, p. 78 参照。
- (21) H. A. Wolfson, *Ibid.*, II, p. 292 参照。
- (22) H. A. Wolfson, *Ibid.*, II, p. 292—293 参照。
- (23) H. A. Wolfson, *Ibid.*, II, p. 293 参照。
- (24) H. A. Wolfson, *Ibid.*, II, p. 319 参照。
- (25) H. A. Wolfson, *Ibid.*, II, p. 293 参照。
- 〔朕(→)～return〕 朕(→)の表現は、蓋絶(→)が、今々必ずあり。あるある持続(→)と存在する場合も、属性の中には在りしないのだかも。
- (26) 朕(→)参照。
- (27) B. Spinoza, *Ibid.*, V, Proposition 22 参照。
- (28) M. Gueroult, *Ibid.*, II, p. 98—99 参照。
- (29) M. Gueroult, *Ibid.*, II, p. 98 参照。
- (30) M. Gueroult, *Ibid.*, II, p. 99 参照。因る、「ナホカ」によるかの様態の本質としての「ロシハシ」の解釈、やだねむ、様態の本質を、様態としてではなくして神の属性の「ナホカ」の解釈は、ケルヒーによひて、「短論文」的見解への批判やれてよい。だが、L. Robinson, *Kommunikation zu Spinozas Ethik*, Felix Meiner, 1928, p. 289 参照。
- (31) G. Deleuze, *Spinoza et le Problème de l'Expression*, Les Éditions de Minuit, 1968, p. 178 参照。
- (32) M. Gueroult, *Ibid.*, II, p. 99 参照。因る、「ナホカ」によるかの様態の本質としての「ロシハシ」の解釈、やだねむ、様態の本質を、様態としてではなくして神の属性の「ナホカ」の解釈は、ケルヒーによひて、「短論文」的見解への批判やれてよい。だが、L. Robinson, *Kommunikation zu Spinozas Ethik*, Felix Meiner, 1928, p. 289 参照。
- (33) M. Gueroult, *Ibid.*, II, p. 100—101 参照。因る、「ナホカ」、「眞理」あるいは「體」は、ある世に被冠命存在 Einbegrenntheits-Existenz (神の本性が必然的に生じ)、神の属性の「ナホカ」は、被冠命して永遠にされる事物の本質としての「眞理」である存在) として眞理たる、やだ、ある世は持続存在として眞理たるべ。O. Baensch, *Ibid.*, p. 71 参照。
- (34) M. Gueroult, *Ibid.*, II, p. 93 参照。因る、「ナホカ」の次のもと論じてある。「精神の永遠な觀念の対象が、身体の中にある限り、身体もまた永遠である」といひて、様態論、所謂「[...]、體現から、眞理、やまなく出でてゐる」などと云はれてゐる。O. Baensch, *Ibid.*, p. 82 参照。
- (35) H. A. Wolfson, *Ibid.*, II, p. 294 参照。
- (36) H. A. Wolfson, *Ibid.*, II, p. 295 参照。
- (37) H. A. Wolfson, *Ibid.* 参照。
- (38) H. A. Wolfson, *Ibid.*, II, p. 295—296 参照。
- (39) M. Gueroult, *Ibid.*, II, p. 101 参照。

(40) 繩舟は、この頃の江戸、ニヤニヤの聲長を嘆いた。

B. Rousset, *Ibid.*, p. 78—84. 参照。